

高校生のための研究入門

—探究のサイクルを楽しむ—

福井県立藤島高等学校

SSH文系テキスト



年 組 番 氏名

目次

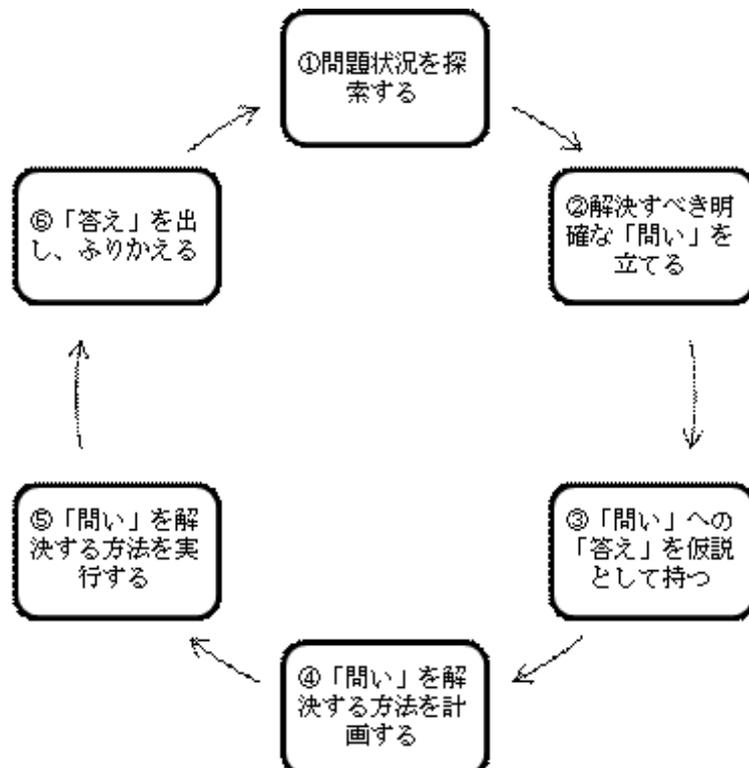
【第1講】 研究論文とは 研究とは

【第2講】 輪読会の進め方

<資料> 基本書リスト

【第3講】 研究手法
文献研究
アンケート
インタビュー

【第4講】 「問い」の立て方 ～「探究のサイクル」と「問い」の発見～



1. 研究論文とは

(1) 研究論文の構成要素

文章には様々な種類があり、その文類に特有の決まりがあります。新聞記事には新聞記事特有の決まりが、小説には小説特有の決まりがあります。

論文は他のどの文章とも違う文章であり、論文にも論文特有の決まりがあります。**論文特有の決まりとは、「問いの背景」「問い」「答え(主張)」「論証(論理・根拠・証拠)」**という4つの要素によって成り立つということです。つまり、**論文とは、明確な「問い」に対する「答え」を説得的に導きだす、科学的な問題解決を目指す文章**だということができます。

ここで注意したいのですが、「問いの背景」「問い」「答え」「論証」という構成要素は、そのまま論文の見出しになるわけではありません。たとえば、**藤島高校の〈研究〉**では、「課題設定の理由」「課題設定」「本論」「結論」という見出しを持つ論文を書きます。この場合、「課題設定の理由」「課題設定」「本論」「結論」はそれぞれ「問いの背景」「問い」「答え」「論証」に当たります。

研究論文の骨格	藤島高校〈研究〉論文の構成
問いの背景	課題設定の理由
問い	課題設定
答え	結論
論証	本論

(2) 構成要素の内実

では、4つの構成要素の内実について説明しましょう。

まず、論文には「なぜ～なのか」「～とはどういうことか」といった、**解決すべき明確な「問い」**があります。社会科学や人文科学の場合は、未来の社会や人間のあり方を展望し、現実の社会や人間のあり方を変化させることが究極的な目標になります。ですので、**社会科学・人文科学の研究を行っている人は、「どうすべきか」という「問い」を根底に持っています。**ただし、「どうすべきか」という「問い」は、必ずしもそのまま論文の「問い」になるわけではありません。「どうすべきか」について思慮深く判断するためには、社会や人間をよく見る目を持つ必要があります。社会や人間をよく見ることで、未来に向けて現在の社会や人間のあり方のどの部分をどう変化させていくかが判断できるのです。したがって、対象を詳しく調べる顕微鏡として働くような「問い」、すなわち「なぜ～なのか」「～とはどういうことか」といった「問い」が論文の「問い」として選ばれる傾向にあります。もちろん、それらの「問い」を解決しつつ、「～すべきかどうか」「いかに～すればいいのか」といった「問い」を解決することもあります。

そして、「問い」があるということは、「問い」に対する「答え」があるということです。**自分で立てた「問い」には、自分で責任を持って「答え」を出すことが必要**です。逆に言うと、「答え」の出しようがない「問い」は、論文の「問い」には適していないということです。しかし、「問い」に対する「答え」は、独りよがりであってははいけません。「問い」に対する「答え」を、読み手に納得させることが必要です。そのために書き手は、**自分の「答え」を論理的に支える根拠や、根**

拠を支える証拠を効果的に配列し、「論証」を行います。以上のような、論文の構成要素である「問い」「答え」「論証」については、ディベートとほぼ同じです。ディベートの経験は、必ず、論文の執筆に活かされてきます。

しかし、論文とディベートには違いもあります。それは、論文には「問いの背景」があるということです。ディベートでは、確かにそれを問題として取り上げるべきであると皆が考えるような、共有された問題が「問い」として与えられます（「脳死は人の死か」「原発は是か非か」）。しかし、論文では自分で問題を探索し、自分の責任で「問い」を立てないといけません。もしかすると、書き手が問題だと思っていることは、読み手にとっては全く問題ではないかもしれません。したがって、論文では、それを問題として取り上げる理由を説明する「問いの背景」が必要になります。**論文にとって最も大切なのは、この「問いの背景」**です。これを書くことによって、ともすると**個人化されがちな「問い」を、社会化・共有化**することができます。

（3）「問いの背景」と「問い」の再構成

ここまでの記述で、論文にとって最も大切なのは「問い」とその背景であることが掴めてきたと思います。研究を進めているときは、常に自分がどのような「問い」を探究しているのか、なぜその「問い」を探究しているのかを忘れないようにしましょう。

ただし、最初に立てた「問い」に固執する必要はありません。**「問い」は必ず変化していきます。**研究が進むにつれて、最初に立てた「問い」は浅かったり、少し角度が違ったりすることに気がつきます。そうした場合には、それまでの探究を捨て去ってしまうのではなく、**それまでの探究が活かされ発展する新しい「問い」を立て直せばよい**のです。「問い」を立てなおすことは、研究が失敗しているのではなく、むしろうまく進んでいる証拠です。「問い」を立て直す必要性を感じた際には、ブレインストーミング、KJ法、構想マップといった方法を用いて、「問い」および「問いの背景」を、時間をかけてじっくりと考え直しましょう。

（4）研究論文を読む

研究論文を読む際にも、「問いの背景」「問い」「答え」「論証」という骨格を意識して読むと、その論文の内容をよりよく掴むことができます。

2. 引用・参照について

（1）剽窃

他者が書いた文章や、他者が発明した重要な「問い」やアイデアを無断で借用し、自分の論文に使用することを、剽窃（ひょうせつ）と呼びます。剽窃という行為は、研究の世界では厳しく禁止されています。**ウェブ上の文章をコピー&ペーストしたり、文献の内容を無断で書き写したりすることは、絶対にしてはいけません。**

（2）引用・参照

だからといって、自分の頭の中にあるオリジナルな考えだけで論文を書くことを求められてい

るわけではありません。むしろ、**他者の考えをできるだけたくさん取り込み、咀嚼して自分のものにし、過去の自分の考えと対峙しながら書く**ことが望まれます。

それではどうしたらいいかというと、**他者から取り込んだものはそうとわかるように、きちんと引用・参照すればよい**のです。どの文献の何頁にこういう記述があり、その記述のこの点が重要だと判断したということ、読み手に分かるように示す必要があります。

(3) 引用・参照の書き方

引用・参照する場合は、本文に脚注をつけ、そこで引用・参照した文献や論文を示すスタイルがあります¹。また、本文中に括弧書きで示すスタイルもあります(戸田山、2002、229-225頁)。文献や論文を読む際には、複数の異なるスタイルに慣れておく必要がありますが、**藤島高校の〈研究〉で論文を書く際には、本文に脚注をつけるスタイルで統一**します。

引用・参照文献の書き方(書誌情報)も様々です。ただし、どのスタイルでも、それを見た他者が確実に元の文献や論文にたどり着くことができる情報が盛り込まれています。具体的には、著者名、文献や論文のタイトル、論文の場合はそれが収められている雑誌名、出版社名、出版年といった情報です。引用の仕方と同様、文献や論文を読む際には、複数の異なるスタイルに慣れておく必要がありますが、論文を書く際には、以下のスタイルに統一します。

竹内康浩『東大入試至高の国語「第二問」』朝日新聞出版、2008年 瀬尾美紀子・植阪友里・市川伸一「学習方略とメタ認知」三宮真智子編著『メタ認知—学習力を支える高次認知機能』北大路書房、2008年、97-109頁 田中耕治『『学力』という問い—学力と評価の戦後史からの応答』日本教育学会『教育學研究』第70巻第4号、2003年、473-483頁 L・ダーリング-ハモンド&J・バラッツ・スノーデン編、秋田喜代美・藤田慶子訳『よい教師をすべての教室へ—専門職としての教師に必須の知識とその習得』新曜社、2009年 Julie Gess-Newsome and Norman G. Lederman (ed.) (1999), <i>Examining Pedagogical Content Knowledge</i> , Kluwer Academic Publishers. Lee. S. Shulman (1987), Knowledge and Teaching: Foundation of the New Reform, <i>Harvard Educational Review</i> , 57(1), pp.1-22.
--

3. 研究とは

(1) オープンであること

ここまで述べてきたことを、別の角度からも考えてみましょう。

論文特有の決まりにはどのような意味があるのでしょうか。なぜ剽窃は厳しく禁じられているのでしょうか。なぜ引用・参照を丁寧に書く必要があるのでしょうか。つまり、なぜ研究にはこ

¹ 引用・参照の書き方については、戸田山和久「第9章 最後の仕上げ」『論文の教室—レポートから卒論まで』NHK ブックス、2002年、229-255頁を参照した。なお、1. 論文とは(2) 構成要素の内実に関しても、この文献に依拠するところが多い。

のような一見わずらわしいルールがあるのでしょうか。

研究上のルールには理由があります。筆者は冒頭に、「論文とは、明確な『問い』に対する『答え』を説得的に導きだす、科学的な問題解決を目指す文章だ」と書きました。一言でいうと、**研究上のルールは、研究が科学的な問題解決を目指すものであるがゆえに存在**します。

では、科学的とはどういうことでしょうか。日常会話やマスメディアでは、「科学的な裏付け」「科学的な真理」「〇〇学の権威」といった言葉に出会うことがあります。これらの言葉からは、科学というものは特定の人が到達した絶対の真理を表現したものであるという印象を受けます。しかし、真偽を検証する権利が特定の人物に制限されていたり、「絶対にこうだ」と言い切ったりするのは、科学ではなく疑似科学です。本来の**科学は、「絶対」を警戒する万人に開かれた営み**です。

少し詳しく説明しましょう。自然科学系の学問、たとえば物理学ですと、未来をできるだけ正しく予測するために、誰が何度やっても再現可能な現象を再現してデータを収集し、その現象が起きる理由をモデルや仮説等を用いて説明することを科学的と呼ぶ場合があります。この場合は、研究の手続きをオープンにすることで、研究を行った本人ではない他者が同じように現象を再現し、データを収集できることが重要になります。そのことによって、モデルや仮説に合わないデータを見つける可能性を作り出すのです。そのようなデータが見つかった場合には、モデルや仮説に条件をつけたり修正したり取り下げたりします。こうして他者からの厳しいチェックを受けて仮説は鍛えられ、徐々に理論体系へと発展していきます。したがって、ある特定の人物にしか起こせないような現象、たとえば空中浮遊などは科学的な研究の対象にはなりませんし、そのような現象を根拠に真理を述べるようなものは疑似科学であるとして厳しく批判されます。

社会科学の場合では、たとえば経済学や実験心理学などでは、以上の自然科学の考え方が採用される場合もあります。しかし、異なる考えが採用される場合もあります。たとえば文化人類学、臨床心理学、教育学といった人間の具体的な実践を研究する学問では、人間の複雑な営みを部分的に切り取って現象を再現したり対象から距離を取って客観的に観察したりすることは、自身の仮説的な理論に合わない事実から目をそらすことにつながることになり、むしろ科学的ではないと主張されるようになってきました。そして、近年では、フィールドに入り込んで人々の実践に参与しつつ実践を発展させるという研究方法が提案されてきています。この場合には、実践から理論が生まれ、その理論が新しい実践を促し、その実践を通して理論が検証され…といったように、理論と実践が循環過程を取ることが科学的であると考えられます。ただし、この場合にあっては、実践の当事者つまり特定の人物にしか理論の正しさが判断できないという事態を防ぐために、事実を記録化し、記録に用いた資料やデータが公開できる状態を担保して、記録化した事実を含む論文を公表します。このことによって、論文を書いた本人以外の他者がいつでも実践の事実を再検討できる可能性を作り出します。

また、人文科学のうちの哲学や文学など、純粋に文献に基づく研究を行う場合でも、どの文献のどの部分に依拠して論述を行っているかを脚注等で明示し、論証に用いる証拠や論証の手続きをオープンにすることで、他者による再検討を可能にします。藤島高校で行う〈研究〉では、この最後の研究手法に当てはまることが多いかもしれません。

科学的であることについての考え方は、分野ごとに少しずつ異なりますし、分野の中でも異な

る考え方があります。しかし、いずれにしても、**科学的であろうとする場合には、研究の手続きをオープンにし、他者からの厳しいチェックを受ける可能性を自ら作り出すことが重要**だということです。研究上のルールは、すべてこの目的のためにあります。

(2) 研究者の倫理

以上からわかるように、**研究者・科学者が行う研究は、個人の興味・関心を探究するというよりも、研究者・科学者コミュニティにおける協働的な活動**だと考えることができます。したがって、研究者・科学者は、これまでに公表されてきた「問い」と「答え」を、人類の知的共有財産であり、敬意を払うべき対象であると考えています。この理由により、剽窃が厳しく禁止されるということもあります。

しかし、研究者・科学者のコミュニティは、それ自体として完結するわけではありません。**研究は、常に人類の平和と幸福のために行われるべきもの**です。研究者は、研究の結果が人類の平和と幸福の発展に寄与するよう、最大限努力しています。もしも研究の結果が、差別や不平等を助長したり、社会や環境に対して負の影響を及ぼしたりする場合には、その研究を行った研究者の倫理が厳しく問われることになります。

もちろん、高校生の研究活動は、職業としての研究者の研究活動とは違います。あくまで興味を持って楽しく研究することを通して、今後の人生にとって必要な能力を身に付けることが目的です。ただし、興味・関心があることならば何でも研究してよいというわけではないことは知っておいてください。**自分の興味・関心は人類の平和と幸福にとってどのような意味があるのか。研究を進める過程の要所において、少し立ち止まって考えてみるのもよいでしょう。**

<参考文献・資料>

浅田彰・黒田末寿・佐藤隆光・長野敬・山口昌哉『科学的方法とは何か』中公新書、1986年

池内了『科学の考え方・学び方』岩波ジュニア新書、1996年

戸田山和久『論文の教室—レポートから卒論まで』NHKブックス、2002年

日本学術会議「声明 科学者の行動規範について」2006年10月3日

ドナルド・A・ショーン著、柳沢昌一・三輪建二監訳『省察的実践とは何か—プロフェッショナルの行為と思考』鳳書房、2007年

1. 読書と研究

(1) 3種類の本の読み方

〈研究〉において研究を進める際には、**同じ本を集団で読み深める輪読会**と呼ばれる活動を行います。また、輪読会を踏まえて行われる研究においても、必ず本を読みます。本の読み方は、時と場合によって異なります。ここでは、「情報として読む」「古典として読む」「案内書として読む（ガイドブックとして読む）」の3つに分け、それぞれについて述べていきます。

ただし、「この本はこの読み方しかできない」というわけではありません。情報を得ようと思って読んだ本が自分にとって古典になる場合もありますし、誰もが古典と認める本の中の情報を必要として読む場合もあります。また、本はひとまず読んでみないとその中身がわかりません。ですので、本を読み進めながら、「今はこの本を『～として読む』という読み方をしよう」と自分で判断することが大事です。

(2) 情報として読む

「情報として読む」は、容易に想像ができると思います。私たちは手にしたい情報を求めて、ウェブサイトで調べたり、テレビを見たり、本を読んだりします。

意外に思うかもしれませんが、**研究で読むような本は、情報の密度と信頼性において、他のメディアとは比較にならないくらい優れています**。よく、「本の文章は1文を書くのに3冊の本を読む必要がある」と言われます。本の書き手は、問題を多角的に検討するために、様々な立場から提示された大量の情報を組織し、的確に選択して提示しています。また、引用や参照を行って情報源を明示したり、さらに知りたい人のために巻末で本の紹介を行ったりしていますので、他の本の情報も得ることができます。このように、本を読むと、ウェブサイト等で調べるよりも、遥かに密度と信頼性の高い情報を入手することができます。

ただし、すべての本がそのように書かれているわけではありません。時には情報が偏っていたり、十分な証拠もなく主張が展開されたりしています。メディアリテラシーや情報分析など、様々な能力を十分に働かせて読んでいきましょう。

(3) 古典として読む

一方で、本を読んでいると、一度読んだだけでは満足できなかつたり、理解できない部分がたくさんあったりして、何度も読み返してしまう場合もあります。このような場合は、「古典として読む」という読み方をしていると言うことができます。

皆さんには同じ本を何度も読んだ経験がまだないかもしれませんが、「古典として読む」ことはうまく想像できないかもしれません。でも、映画や漫画ではあると思います。幼い頃に「風の谷のナウシカ」を見た時には主題や各シーンの意味がよくわからなくても、**何度も見ているうちに理解が深まりいろいろな解釈が出てくる**ことは想像できると思います。実際に、友達同士で議論したこともあるかもしれません。

研究で読む本に関しても、同じようなことが起こります。たとえばデカルトは、『方法序説』という本の中で、「我思う、故に我在り」という有名な言葉を述べました。「我思う、故に我在り」は、精神と身体を分離させ、身体（物質）に対する精神の優位性を主張し（心身二元論）、客体である物質を要素に還元し主体である精神がそれを操作する近代科学の基礎を作ったと解釈されてきました。そして、そのような近代科学の基礎にある考えが、科学の暴走や環境破壊を引き起こしたと批判されてきました。しかし、批判が進む過程で『方法序説』の読み直しが起こり、デカルトが本当に述べたかったことは心身二元論のような内容ではないというデカルト再解釈・再評価が起こってきています。偉大な本は「古典」として読み直され、大きく解釈し直されるものです。

研究で読むようなしっかりした本であれば、時代をつくるような本でなくても、複数の解釈を起こさせる何かがあります。集団で読んでいて複数の解釈が起こったり、何度か読むうちに解釈が変わってきたりした際には、自分にとっての「古典」に出会うことができたのだと思いたくしょう。そして、持っている能力を総動員し、思いきりぶつかっていきましょう。

（４）案内書として読む

さて、〈研究〉の輪読会で本を読む場合は、「情報として読む」「古典として読む」のではなく、**「案内書として読む」ことが基本**となります。「案内書として読む」は、「情報として読む」や「古典として読む」をも含みこんだ読み方です。もちろん、先述したように、「この本はこの読み方しかできない」というわけではなく、輪読会で読む本を純粹に「情報として読」んだり「古典として読」んだりすることが求められる場合があります。しかし、輪読会では「案内書として読む」のに適した入門書が選定されていますので、ひとまず「案内書として読」んでいきましょう。

それでは、「案内書として読む」とはどういうことでしょうか。研究の初心者が研究を行うことは、初めて海外旅行に出かけるのに似ています。海外旅行に行く際は、案内書を参照しながら、その土地の基本的な要素（気候、通貨、文化など）を理解していきます。そして、この土地はだいたいこんな土地だろうとその特徴を大きく把握し、実際に旅行した際にはここに時間をかけようとか、ここに気をつけようとか思いめぐらします。

研究の入門書を読む場合も同じです。どの研究分野にも、その分野全体の基礎となるような理念・哲学があり、分野ごとに独自の「問い」の立て方があります。**すぐれた入門書であれば、冒頭部分に、その分野の基礎となる理念・哲学と「問い」が明確に書かれてあります。**ただし、理念・哲学といった基礎的なものほど短時間では理解しづらく、反対に各論は興味深く魅力的に見えます。

たとえば、渋谷秀樹『憲法への招待』という本は、「はじめに」そして第1章「憲法とは何か」から始まり、第2章「人権は誰の権利か」第3章「人権にはどのようなものがあるか」と続いています。そして、それぞれの章に4～9個の具体的な論題が掲載されています。最も大事なことは、「はじめに」や第1章「憲法とは何か」に書いてありそうだとすることは見当がつかます。しかし、具体的な論題である『「はじめ」は人権問題であるといえるか』や「電話の盗聴を認める法律は違憲ではないのか」などは、それ自体多様な議論を呼び起こすものであり、これらの各論題に興味関心が動かされます。結果として、「憲法とは何か」という最も基礎的なところの理解が疎か

になってしまうことがあります。

もちろん、「案内書として読む」のですから、案内書を手に実際に旅行する、つまり実際に研究を行う際にはこのあたりの論題に迫っていこう、この分野の中でも自分はこのあたりに関心がありそうだ、と探っていくこと自体は必要なことです。しかし、それによってその分野全体の理念を大きく掴むことを忘れてはいけません。**個別的・部分的知識だけにとらわれず、その根底にある理念・哲学まで届くように、1冊通してじっくりと読んでいきましょう。**1冊読み通すことができれば、2冊3冊と読んでいくのもいいです。複数の案内書があれば、万全の計画を立てて様々な側面から旅行を楽しむことができます。

また、研究の入門書であれば、研究のルールもしっかりと守られています。**研究や研究論文のルールを学ぶためにも、その論文の見本として、とりあえず入門書を1冊読み通してみましよう。**

2. 輪読会の意味

(1) 輪読会のレポートの書き方

輪読会では、**グループの全員が同じ本を同じペースで読んでいきますが、全員がレポートを書きます。**藤島高校の〈研究〉におけるレポートの構成は、次頁のようにします。**自分がその分野の理念・哲学、「問い」の立て方をどのように理解しつつあるのかを意識できるような構成**になっています。輪読会では、一人ひとりがこのようなレポートを持ち寄り、互いの学びを交流していきます。

(2) 集団の力を借りて疑問を持つ

次項に示した構成の中でもっとも難しいのは、「**疑問に思った点・授業で議論したい点**」かもしれません。学校ではどうしても教師が「問い」を出して生徒が「答え」を出すという役割分担が起りがちですので、私たちは自ら疑問を持つということに慣れていません（以下、研究を導く疑問は「問い」、そうではないものは単に疑問と分けて書きます）。また、疑問を出すことはよく理解できていない証拠だと思われてしまいがちなので、疑問を出すことに消極的になってしまいます。しかし、実際には**優れた読み手は常に疑問を持ちながら本を読んでいますし、漫然と読むのではなく自問自答しながら読むとよりよく内容を理解できるようになることは認知心理学の研究でも明らかになってきています。**何より、〈研究〉では最終的に自分で「問い」を立てないといけません。上手に「問い」を立てるためには、輪読会においても疑問を蓄積しておく必要があります。

それでは、どうしたら読んだ本の内容に関して疑問を持つことができるのでしょうか。社会科学・人文科学の世界では、読書の指導をする際によく「**信じて疑え**」と言われます。それは、本の内容を信じつつもどこかでは疑っていなさいという意味ではありません。**できるだけ一貫性のある解釈をしようとする、筆者の主張を体系的に信じようと努力するからこそ、疑問が生まれるという意味**です。視野を広く保ってより大きく掴もうとする、あの箇所もこの箇所も統一的に理解できる一貫性のある解釈を作り上げようとするのが大事です。そうするからこそ、**自分が作り上げようとしている一貫性のある解釈に合わない箇所が、疑問として浮かび上がってくるので**

2012年11月1日「法と政治」

渋谷秀樹『憲法への招待』岩波新書、2001年

タイトル

(＊タイトルにはもっとも伝えたいことを書く。たとえば「憲法とは要するにこういうものである」という自分の考えを示すなど)

橋本左内

藤島高校1年1組

1. これまでのふりかえり

自分はなぜ「法と政治」を選んだのか、「法と政治」という分野はどのような分野だと考えてきたのか、『憲法への招待』を読む前に「憲法」や「法と政治」に関してどのように考えていたのか、『憲法への招待』を途中まで読み進めてきてどのように考えが変容してきたのか等について書く。

2. 当該部分の要約

課題になっている当該個所の要約を書く。その際、『憲法への招待』全体で言いたいことと当該個所で言いたいことの関連、それまで読んできた箇所と今回読んだ当該個所の関係を考えて書く。常に広い視野を保つように心がける。

3. 当該個所の要約を踏まえた自分の考えの変容

当該個所を読んで、「法と政治」という分野や「憲法」に関する自身の考えがどのように変容したのかについて書く。

4. 疑問に思った点・授業で議論したい点

疑問に思った点、友達や先生に聞いてみたい点、話しあってみよう点について書く。

5. 輪読会メモ

(輪読会を行いながら、重要だと判断した点をメモしていく)

す。

しかし、このようなことを一人で行うのは、大変難しいことです。ただ、一人ではできないことでも集団でならできます。一定の分量のある本を読んでいるとき、人は必ず読み飛ばしている箇所があります。そして、他者は自分が読み飛ばした箇所を根拠にして、違う一貫性のある解釈をつくってきます。そうすると、**自分と他者の間に解釈の相違が起こり、疑問が生じ、筆者が本当に言いたいことを集団で探る探究が起こってきます。**このような経験を繰り返しているうちに、**次第に自分の心の中に複数の他者が住むようになり、一人で異なる複数の解釈を作り上げること**

ができるようになってきます。 集団の力を借りてできていたことが一人でもできるようになっていくということです。

一人では研究など難しくできないからこそ、学校において集団でチャレンジするのです。まずはその分野の理念・哲学を理解しようとし、それまで読んできた箇所全体に一貫性のある解釈を作り上げようとしましょう。そして他者と解釈を交流し、徐々に疑問を生む心をつくっていきましょう。

<参考文献>

内田義彦『読書と社会科学』岩波新書、1985年

丸山眞男『「文明論の概略」を読む 上』岩波新書、1986年

河野哲也『第3版 レポート・論文の書き方入門』慶應義塾大学出版会、1997年

大村彰道監修、秋田喜代美・久野雅樹編集『文章理解の心理学—認知、発達、教育の広がりの中で』北大路書房、2001年

第2講＜資料＞ 基本書リスト

- 法学・政治学 渋谷秀樹『憲法への招待』岩波新書、2001年
杉原泰雄『憲法読本 第3版』岩波ジュニア新書、2004年
佐々木毅『民主主義という不思議な仕組み』ちくまプリマー新書、2007年
樋口陽一『個人と国家 ― 今なぜ立憲主義か』集英社新書、2000年
- 経済学 岩田喜久男『経済学を学ぶ』ちくま新書、1994年
伊藤元重『時代の“先”を読む経済学』PHP ビジネス新書、2011年
- 国際関係論 原康『国際関係がわかる本』岩波ジュニア新書、1999年
国際政治学 村田晃嗣・君塚直隆・石川卓・来栖薫子・秋山信将『国際政治学をつかむ』
有斐閣、2009年
- 歴史学 小田中直樹『歴史学って何だ?』PHP新書、2004年
- 心理学 市川伸一『心理学って何だろう』北大路書房、2002年
松井豊『高校生のための心理学』大日本図書、2000年
- 教育学 堀尾輝久『教育入門』岩波新書、1989年
藤田英典・田中孝彦・寺崎弘昭『教育学入門』岩波書店、1997年
広田照幸『ヒューマニティーズ 教育学』岩波書店、2009年
- メディア論 佐藤卓己『メディア社会』岩波新書、2006年

第3講 研究手法

1. 文献研究 ―― 参考文献収集の手引き

ことわりのないコピー・アンド・ペースト (Copy and Paste) は絶対にしてはいけません
→ 引用した部分は「 」をつけて明示し、出典も必ず書きましょう
図書の中で引用したい部分には付箋を貼っておき、まとめてコピーをしておくこと
→ 調べたことの発表ではなく、調べたことを元に自分の頭で考えたことの発表に！

(1) 図書館と検索 (図書館を上手に使うことが決定的に大事です)

- ・藤島高校図書館 (蔵書数約3万8千冊)

藤島高校HPから蔵書検索できます

- ・福井市立図書館 (蔵書数約36万冊) (0776) 20-5000

火・土・日 10:00~17:15

水・木・金 10:00~19:00

休館日 毎週月曜日、国民の祝日、毎月第三日曜日など

10冊2週間貸出

福井市立図書館HPから蔵書検索も予約もできます

県内の公共図書館はもちろん、県外の公共図書館にしかない本も取り寄せられます

- ・福井大学附属図書館 (蔵書数約48万冊) (0776) 27-8416

平日 9:00~20:00

土日祝 13:00~16:00

生徒手帳を持参すれば高校生にも貸し出してくれます

図書のみ 3冊1週間貸出

- ・福井県内図書館横断検索 (蔵書数約460万冊)

HPで、「福井県内図書館横断検索」と検索する

県内公共図書館の蔵書約460万冊をまとめて一度に検索できます

すべて、福井市立図書館に申し込めば、福井市立図書館で受け取ることができます

(2) インターネット

- ・藤島高校の「研究」では、インターネットからの安易なコピー・アンド・ペーストを厳禁します

「研究」では、あくまで図書による研究を原則とします

インターネットは、図書を検索するためだけに使いましょう

2. アンケート

*この項は、小林・船曳編『知の技法』に依拠するところが多い

(1) 安易なアンケートはしない

アンケートは、テーマについて客観的・実証的に論じるために、社会科学・人文科学にとって、非常に重要な方法です。しかし、質問内容を十分吟味しないで安易に実施することは、厳に慎みましょう。

- ① **質問項目を十分に検討**する
- ② **調査の目的を明確**にする
- ③ **結果の分析を慎重**に行う

(2) アンケートを作る手順

単なる思いつきで質問項目を作るのではなく、一定レベルの手続きを踏んで作成しましょう。藤島高校の「研究」では、少なくとも以下の手順を踏むこと。

- ① **知りたいテーマについての文献研究**
少なくとも2～3冊の文献を読んで、そのテーマについてある程度の基礎知識を得る
- ② **インタビュー**で5～10人にそのテーマについて話を聞く
調査対象者の一部に直接会って、いろいろな角度からインタビューする
→ インタビューの回答を丁寧に分析する
→ 発言内容をパターン化して、問題の構造を見つけ出す
- ③ **仮説を立てる**
問題の構造の中から、自分が知りたい「**問い**」を見つけ出し、アンケートの**目的**を明確にする
→ 自分の「問い」に対し、自分なりの「**答え**」を予想する
- ④ **仮説を証明するための質問**を考える
漠然とした質問でアンケートをとって、後から何が言えるかを考えるという手順では、論証の説得力が弱くなり、分析が貧弱になる
→ この質問の結果で仮説が十分な根拠を持って主張できる、という質問項目を考える

(3) 結果の分析

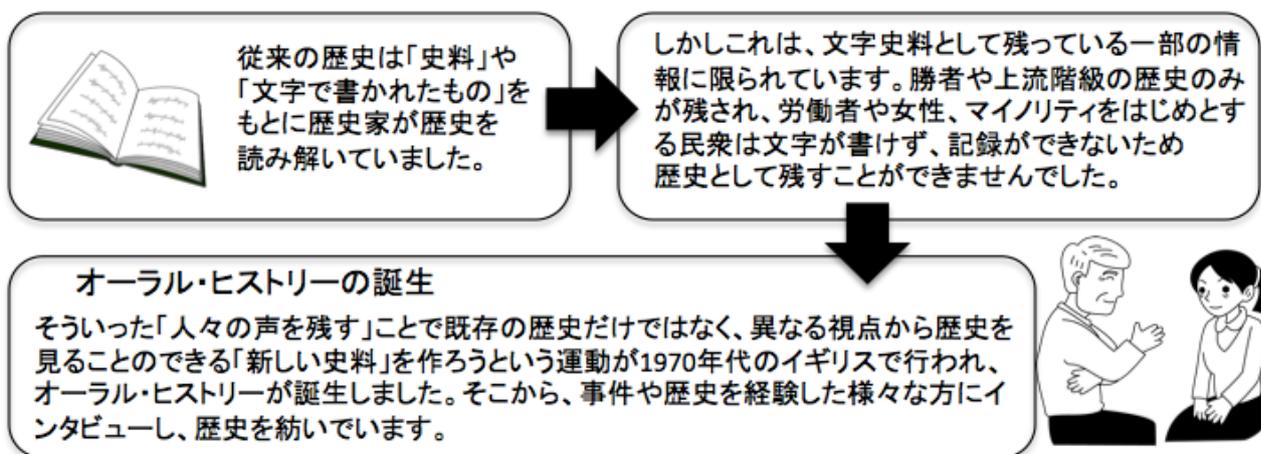
- ① 結果の分析は、禁欲的に
分析にあたって、**確実に言えることだけに言及**しましょう。我田引水・牽強付会な読み取りにならないよう注意すること。
- ② データの読み間違いに注意する
前期の最後に行った、「**擬似相関**」などの「**読み間違い**」に注意しましょう。
- ③ 仮説と違う結果が出ても全く構わない
もう一度「問い」を立て直し、アンケートを取り直すという、「**問い**」と**実証のサイクル**を繰り返すことこそ「**探究**」なのです。

ここではインタビュー手法の1つの例として、「オーラル・ヒストリー」を紹介します。

(1) オーラル・ヒストリーとは？

インタビューを使って個人の体験の聞き書きを行い、人の記憶を歴史史料にしていく行為のことです。インタビューを記録した口述史料（音声データやインタビュー記事）そのもののことを指すこともあります。

(2) オーラル・ヒストリーが生まれた背景



(3) オーラル・ヒストリー研究の手順

テーマを決める	・グループの興味関心からテーマを絞ります。
候補対象者の選定	・テーマに沿ったインタビュー（インタビューする人）を選び、アポイントメントをとります。
事前準備（文献調査）	・テーマに関する歴史・現状を本やインターネットから調べ、何が明らかになっているのか、いないのかを調べます。
事前準備（質問表作り）	・調査結果をもとにインタビューに質問する項目を作り、インタビューに備えます。
オーラル・ヒストリー・インタビュー実施	・実際にインタビューにお会いして、お話を聞きます。
まとめ作業	・インタビュー記事をまとめ、最終発表を行います。

参考になりそうな本

【インタビューの基本を抑えるための本】

鈴木淳子『調査的面接の技法』ナカニシヤ出版、2005年

【オーラル・ヒストリーに関する本】

御厨貴『オーラル・ヒストリー入門』岩波書店、2007年

御厨貴『オーラル・ヒストリー』中公新書、2002年

第4講 「問い」の立て方 ～「探究のサイクル」と「問い」の発見～

福井大学准教授 八田幸恵

1. 「探究のサイクル」

(1) 探究の方法に関する知識の重要性

どのようにしたら、研究を上手に進めることができるのでしょうか。研究を上手に進められる人とそうでない人の中には、どのような違いがあるのでしょうか。

一般に研究と呼ばれるような高度な探究活動は、ひらめきや特殊な才能によって支えられているわけではありません。探究は、探究の方法に関する知識によって支えられています。探究を上手に進められる人は、探究の方法に関するしっかりした知識を用いて、自らの活動を自覚的にコントロールしているのです。探究の方法に関するしっかりした知識があれば、誰でも探究を上手に進めることができます。

(2) 循環する6つの局面

それでは、探究の方法とはどのようなものなのでしょうか。次のような事例で考えてみましょう。まず、あなたは、幼児期の子ども、特に遊びが気にかかっています。そこで、「子どもはなぜ遊ぶのか？」という「問い」を立てました。「問い」を立てた時点では、「おそらく遊びを通してルールを身に付けるなど、将来の社会生活の準備をしているのではないか」と考えていました。こ

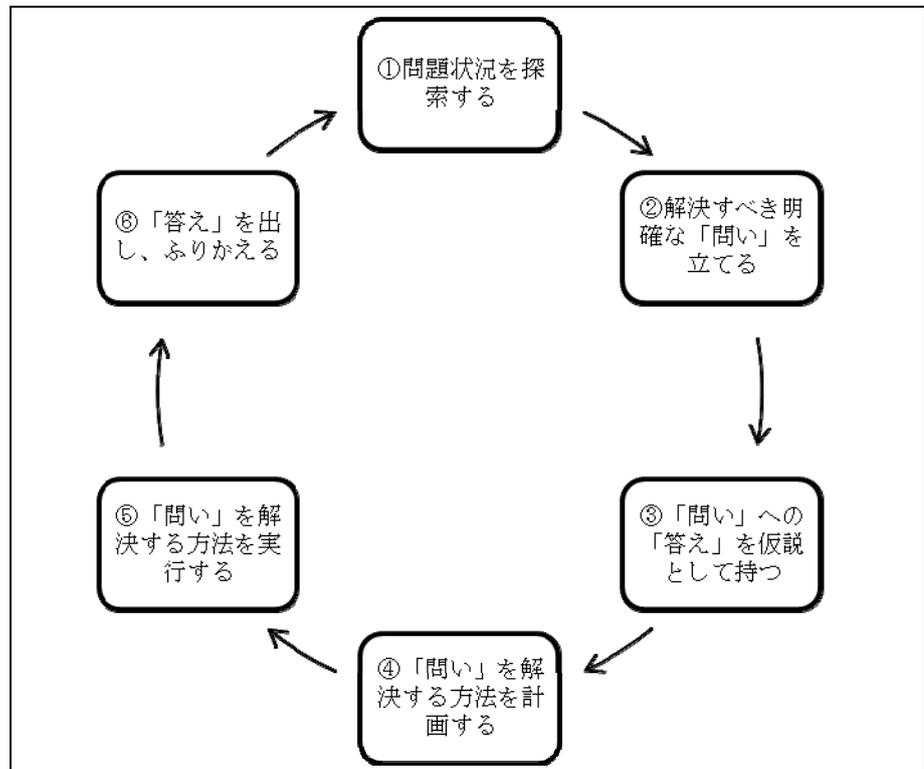


図1 探究のサイクル=探究における6つの局面

のような考えでよいのか確かめたいと思い、遊びに関する文献をひとまず読んでみました。すると、あなたの考えの他にも、動物の遊びのように余ったエネルギーを放出しているという説や人類の進化の過程を個体の中で繰り返しているという説が歴史的に提出されてきたことがわかり、また最近では、遊びは他の目的のための手段ではなく遊び自体が目的だと主張する全く新しい説が出てきていることがわかりました。読んでいるうちに、「子どもはなぜ遊ぶのか？」という「問い」はますます大きくなり、「人間の遊びと動物の遊びは違うのか？」「子どもの遊びと大人の遊びは違うのか？」「そもそも遊びとは何か？」「遊びにはいくつくらいの種類があるのか？」とた

くさんの疑問がわいてきました。

以上のようなプロセスを探究の典型として、図1のように抽象化してみましょう。まず、探究は、①**問題状況を探索すること**から始まります。漠然と疑問に感じていること、なんとなくもやもやしていることを探り、何が問題の核心なのかを明確にしていきます。問題の核心が明確になってくると、②**解決すべき明確な「問い」を立てます**。「問い」を立てる際には、普通、私たちは何らかの予想や仮説、また見通しを持っているものです。そこで、③**「問い」への「答え」を仮説として明らかにしておきます**。仮説を明らかにしたら、④**「問い」を解決する方法を計画します**。仮説を検証するための厳密な計画を立てることもありますが、いったん仮説を脇において自由に解決の方法を考えることも重要です。その方法は、実験であるかもしれませんが、文献や資料を組織し読みこなしていくことかもしれません。そして実際に、⑤**「問い」を解決する方法を実行します**。そうすると、立てた「問い」に対する一応の「答え」が出ますが、「問い」が解決されつくされることはありません。仮説に照らして「答え」を導き出す過程において、必ず複数の小さな「問い」が生まれ、また漠然とした問題状況へと戻ります。したがって、再度①問題状況を探索するに戻ります。

このように、探究には循環する6つの局面があります（「探究のサイクル」）。**探究は一度きりで終わるのではなく、何度も繰り返されるサイクルの積み重ねによって発展していく**ということです。

（3）グループでの探究の場合

グループで探究活動を進める場合は、「探究における6つの側面」のそれぞれに、**分担と共有という要素が組み込まれてきます**。具体的に言うと、①～③まではグループで一緒に進め、④においてはグループメンバーの間において、仕事の分担を決定することが含まれてきます。⑤では、いったんグループを離れ、個人での仕事を遂行することが多くなります。そして、⑥は、⑤において個人が行ってきた仕事を交流し、それぞれが「答え」を導き出す過程で生まれた疑問を共有し、新しい問題状況を探索していきます。

（4）フレキシブルに

「探究のサイクル」は、以上のように定式化することができます。しかし、常に①の局面から⑥の局面へと、一つずつ順を追って進んでいくわけではありません。ときには局面の順番が入れ替わったり、同時に二つの局面を行ったり、ある局面がとばされたりします。**探究がダイナミックにうまく進んでいるときほど、6つの局面はフレキシブルなものになります**。

「探究のサイクル」という考えは、むしろ、探究がうまく進んでいない際にその原因を調査する道具として用いることが望ましいものです。活動に没頭するあまり「問い」を見失ったり、あるいは「問い」に対する「答え」を性急に確定してしまい、探究が浅いまま終わってしまったりすることがあります。そのような場合は、「探究のサイクル」を参照し、**自分はどこでつまづいているのかを考え、また活動を再開**しましょう。確認しますが、重要なことは、サイクル全体を何度も経験するということです。何度も経験しているうちに、「探究のサイクル」を回すことに上達していきます。

2. 「問い」の発見

(1) 重要な「問い」

探究において「問い」が決定的に重要になることは、皆が納得するところだと思います。しかし、息の長い探究を導くような重要な「問い」を立てることは、非常に難しいことです。「問い」の「答え」がすぐに出てしまったり、あるいは逆に「問い」の解決の仕方が全く検討つかなくなったりすることが多くあります。それでは、重要な「問い」を立てるにはどのようにすればよいのでしょうか。事例を参照しつつ考えてみましょう。

(2) 事例1 グループ1の場合

事例として、グループ1の探究のプロセスを追ってみましょう。グループ1の場合、比較的狭い「問い」を設定しており、その「問い」に従って寄り道なく上手に探究を進めている印象を受けます。

グループ1は、まず、将来教職に就くにあたって日本以外の諸外国の教育の実際も知りたいという漠然とした問題状況を探索し、「外国での教育はどのようなものなのか？」という「問い」を立てています。そして、その「問い」を解決するために、2冊の文献を読むことを計画し、実際に読み、各国の教育の実際を掴んでいます（おそらく、分担して読み、報告し合って全体を共有したと考えられます）。そして、結果として、「国によって教育の歴史や教科書に大きな違いがある」ことや、「その国によって『その国の市民になるための教育』だったり『子どもが社会に出るための準備をしてあげるための教育』だったり」と全く異なっているという「答え」を導いています。この「答え」により、日本はどうなっているのかという漠然とした問題状況を探索し、「次は日本の教育の歴史と、日本においては何を『教育』というのかを調べて色々な国と比較していく」という「今後の課題」を設定しています。「今後の課題」を「問い」のかたちで書いてみると、「日本においては何を『教育』というのか？それは日本の歴史社会状況とどのように関わっているのか？」といったものになるでしょう。以上からわかるように、グループ1の場合、「探究のサイクル」がちょうど一回転していることとなります。

ここで、グループ1が最初に立てた「問い」と、最後に立てた「問い」を比較してみましょう。最初の「問い」は「外国での教育はどのようなものなのか？」であり、最後の「問い」は「日本においては何を『教育』というのか？それは日本の歴史社会状況とどのように関わっているのか？」です。比較してみると、「問い」が深まっていることがわかると思います。最初の「問い」は「何を教育というのか？」というまだ漠然としたものです。それに対して最後の「問い」は、それまでの他国の教育に関する探究を踏まえて、より明確なものになっています。具体的には、日本の教育も他国と同じように歴史文化状況に大きな影響を受けているはずであると考え、「それは日本の歴史社会状況とどのように関わっているのか？」という観点がついた「問い」になっています。このように、**探究を導く「問い」は、最初から最後まで変化しないのではなく、探究が進むにつれて観点が付されていき、より明確なかたちになっていくものです。「問い」は成長するのです。**

ちなみに、グループ1が取り組んでいる「何を教育というのか？」といった「問い」で指し示す内容は、教育学の専門用語では教育目的と言います。教育目的というキーワードを手に入れると、**次の探究のあり方がまた大きく変容することになります。研究者・専門家に話を聞くときは、「問い」への「答え」というよりも、キーワードや論点などを引き出すことを意識してみるとよ**

いでしょう。

(3) 事例2 グループ2の場合

次に事例2として、グループ2の探究のプロセスを追ってみましょう。グループ2の場合、学術的な新書を3冊も読むといったように、非常に高いレベルの内容にチャレンジしています。そのため、文献の内容を掴むことに精一杯になり、自分たちの「問い」をコントロールしきれない印象を受けます。しかし、このように精一杯背伸びをしてチャレンジし、たくさん寄り道をしながら探究を進めるのも、大切なことです。

グループ2の場合は、冒頭に「問い」が書かれてありません。最後のスライドに書いてあるように、教育といっても何を調べていいのかかわからず、漠然とした問題状況のまま、「問い」を立てずに探究を開始したことがわかります。しかし、それでもひとまず小学校低学年に焦点を絞り、その焦点に合った文献を読むことを計画し、実際に読んでいっています。そして、幼児期の生活経験に裏打ちされた一次的事実と、児童期に学校で獲得する書き言葉である二次的事実の関係を探っていきます。次にグループ2は、小学校低学年に特有の教科である生活科について調べています。ここでも明確な「問い」を立てずに、探究を開始しています。そしてその結果、「特に小学校低学年の生活科に着目し研究を進めていくと、この時期の子どもは想像もできないほど成長している」「身体の成長、言葉の成長、また社会の中での自分の役割そのほかにも多くのことを身につけて成長」「ことばが子どもの成長に深く関わっていることと、生活体験によって子どもが基本的な生活態度を学ぶこと」といったことがわかったと述べています。

以上のようなグループ2の探究のプロセスを整理し直すと、スライドの最後の時点で、「幼児期～児童期にかけて子どもはどのように発達するのか？生活経験や一時的・二次的言葉は子どもの発達にどのような影響を与えるのか？」といった観点のついた「問い」が浮かび上がり、その「問い」を、生活科を素材として探究していこうと計画していることが見えてきます。ここにおいて、ようやく「問い」と「問い」を解決する計画がかたちをとってきたことがわかります。

以上のように、**探究は、ひとまず徹底した調べ学習を行い、その過程において後から「問い」を生成するということがあります。**「問い」が立たないままに調べ学習を行っている最中は、研究がかたちになるのか不安になります。しかし、**きちんと文献や資料にあたり、その内容を他者に向かって報告し、自分たちの歩みを振り返っていれば、必ず「問い」は浮かびあがってきます。**

ちなみに、研究者は探究に関してたくさんの失敗を経験していますので、一見うまくいってないかのように見える探究を整理し軌道修正することが得意です。**研究者とコミュニケーションをとる際は、自分たちの探究の歩みをじっくり聞いてもらうのもよいでしょう。**

(4) ロングスパンでの「ふりかえり」

ここまでの記述で、「問い」は最初から明確なかたちをとるものではなく、後から徐々に浮かび上がってくるのであることが理解できたかと思います。「探究のサイクル」は繰り返されるものですし、「問い」はある程度「探究のサイクル」を積み重ねた後によりよく発見されるものです。

「問い」を発見するためには、探究の要所においてそれまでの探究をロングスパンでふりかえることが重要です。1時間ごとのふりかえりだけでなく、時にはポートフォリオを最初からすべてふりかえってみる必要があります。というのも、「問い」を発見すること自体が探究的な行為であり、「探究のサイクル」と同じような構造を持っているからです（「問いを発見するサイクル」）。

「問いを発見するサイクル」は、図2のようになります。まず、①これまでの探究の歩みをふりかえり、②様々な発展の方向性を把握し、進むべき方向を定めます。進むべき方向が定まると、③定めた方向に向かって、これまでの探究を整理し直します。整理をし直す過程において、その整理を導き出すような④「問い」を発見します。

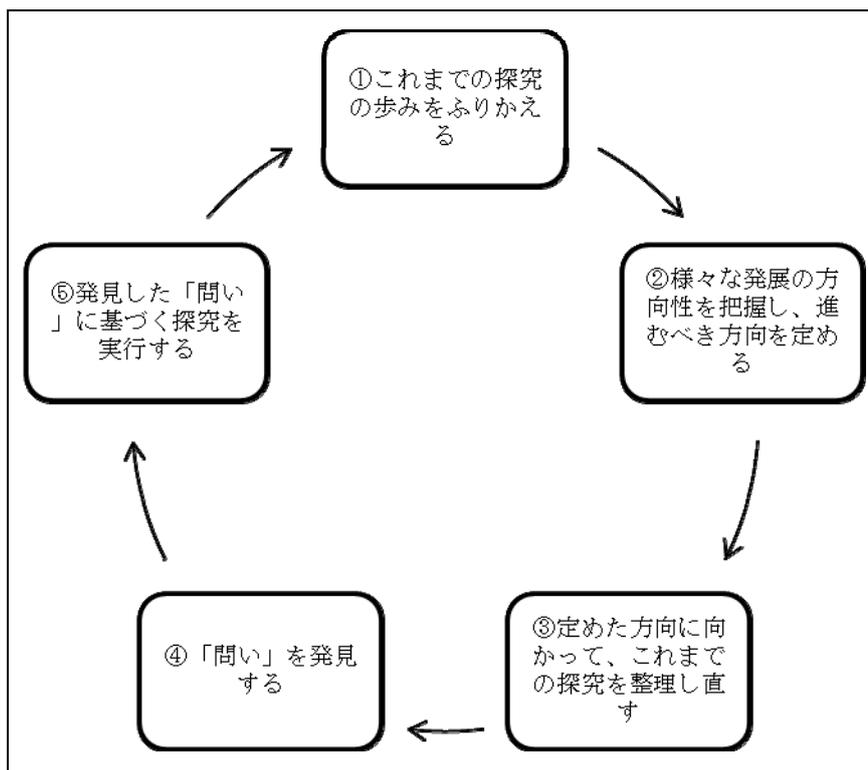


図2 「問いを発見するサイクル」

そのようにして「問い」を発見したら、再度探究に戻り、⑤発見した「問い」に基づく探究を実行します。

以上のような「問いを発見するサイクル」は、「探究のサイクル」を積み重ねている途中において挟み込まれます。「問いを発見するサイクル」を挟みこみ、「問い」を立て直しながら、探究は進められていきます。「問い」を立て直すことで、探究は整理され、方向を与えられ、発展していきます。

3. 研究論文を書く

(1) 研究論文の構成要素の再確認

先述したように、研究論文は「問いの背景」「問い」「答え」「論証」という4つの構成要素を持っています。研究論文を読む際には、それら4つの要素を意識して読む必要があります。もちろん、みなさんが研究論文を書く際にも、4つの要素を意識して書く必要があります。

(2) 探究の過程を書くこと 探究の結果を書くこと

しかし、ここまで研究を進めてきたみなさんは、探究は「問いの背景」「問い」「答え」「論証」と一直線に進むものではないということは理解できるでしょう。探究の過程は、「探究のサイクル」と「問いを発見するサイクル」が何度も実行される、無駄の多い複雑なものです。そこで、〈研究〉の中間発表会や教授質問会では、探究の過程を率直に表現し、今後の探究に示唆を与える有効なアドバイスを得ようと努力します。有効なアドバイスを得ることができるかどうかは、探究の過

程がきちんと表現されているかどうかにかかってきますので、探究の過程を書くことは探究を進める上で非常に重要になってきます。

しかし、研究論文を書く際には、ひとまず探究に区切りをつけて、探究の結果だけを他者に向けてアピールします。というのも、研究論文とは科学的な問題解決を目指す文章であり、自身の問題解決を読み手に対してより効果的に説得的に見せる必要があるからです。したがって、**〈研究〉の最終段階である論文を書く時には、それまでの探究を大胆に整理し直し、「問いの背景」「問い」「答え」「論証」をわかりやすく直線的に表現することが必要**です。研究論文を書く際には、「**問いを発見するサイクル**」を実行し、読み手を説得に導く「**問い**」を設定し、その「**問い**」に従って論文を書いていきましょう。

<参考文献>

藤井千春『問題解決学習のストラテジー』明治図書出版、1996年

宅間紘一『三訂版 はじめての論文作成術』日中出版、2000年

文部科学省『高等学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編』平成21年12月

日本図書館協会 図書館利用教育委員会 図書館利用教育ハンドブック学校図書館（高等学校）版
作業部会『問いをつくるスパイラル 考えることから探究学習をはじめよう！』日本図書館協会、
2011年

八田幸恵「国語科における課題探究プロセスの育成のあり方—高校国語科現代文『こころ』の授業研究を通して—」福井大学教育地域科学部『福井大学教育地域科学部紀要』第2号、2012年、
171-209頁



.** 外国の教育 **.

.** 「揺れる世界の学力マップ」 **.

【本について】
佐藤学、澤野由紀子、北村友人編著 明石書店 2009

【内容】

- 序章 世界と学力の多様性を描き出す
- 第1章 欧州連合(EU)
- 第2章 北米
- 第3章 イギリス
- 第4章 ロシア、CIS
- 第5章 北米
- 第6章 ラテンアメリカ
- 第7章 東南アジア、南アジア
- 第8章 東アジア
- 終章 グローバリゼーションの中の日本の学力

【分ったこと】

外国の教育といっても様々。時間をかけて教育が発達してきた国、貧しくて未だに教育が行きとどいていない国がある。



.** 研究動機 **.

- ・将来教育に関わる職業に就きたいから。
- ・教育者になるにあたって様々な国の教育について知りたかったから。
- ・外国で「教育」とはどのようなものを示すのか知りたかったから。



.** 「こんなに違う!世界の国語教科書」 **.

【本について】
二宮晴監修 メディアファクトリー新書

【内容】

はじめに なぜ国語教科書はおもしろいのか?

- 第1章 アメリカ
 - 第2章 イギリス
 - 第3章 フランス
 - 第4章 ドイツ
 - 第5章 フィンランド
 - 第6章 ロシア
 - 第7章 中国
 - 第8章 韓国
 - 第9章 タイ
 - 第10章 ケニア
- おわりに そして日本の教科書は



.** 第1章 アメリカ **.

【内容】

アメリカの教育=アメリカ人になるための教育

- ・アメリカ市民になるための教育。
- ・誰にでもチャンスがあり、才能を発揮すれば少しの運で夢を実現できる。
- ・学校…生徒が社会に出る準備をしてあげる場所。
- ・学区の教育委員会が教科書を選ぶ。
- ・「偏り」を嫌うポリシー。
- ・3種類のシンデレラ(フランス版、中国版、黒人版)が載っている。
- ・教科書を暗記しない。(就職もほぼ面接で決める。)
- ・「何を知っているか」ではなく、「何ができるか」「自分ならどう考え、どう行かうか」を重視する。



.** 第2章 イギリス **.

【内容】

イギリスの教科書=詩が多く掲載

- ・イギリス→自主性を重んじる大人な国。
- ・生徒が好む内容が主に授業で取り上げられる。
- ・詩や戯曲が多く取り入れられる。
 - ジョークないしユーモアに満ちた内容が多い。
- ・喜んで勉強したくなるような教材。(例:学校に行きたくない)
- ・教科書…限りなく自由に近い。
 - 自由発行
 - 自由採択
- ・デジタル教材の普及。
- ・単行本を教材として使用(1冊読み切ること重視)



.** 第3章 フランス **.

【内容】

フランス=共和国が学校を作り、学校が共和国を作る

- ・教科書制度の3つの自由
 - 出版社による教科書発行の自由
 - 学校の教科書選択の自由
 - 教員の教科書使用の自由

- ・フランス共和国の「市民」になるため
 - 小学校から文法の教科書
- ・日本のマンガが絶大な人気。(例:ドラゴンボール)
- ・教科書→全体的に絵画を多く引用。
- ・フランスの苦難の歴史を考えさせる授業。
 - 「レ・ミゼラブル」



.** 第4章 ドイツ **.

【内容】

ドイツの教育=「仕事」に誇りを持つ国の切実、質実な教育

- ・高度なメディア教育。
- ・子どもたちに生活世界を開き、生活世界で行動する力を与えることが目標。
- ・各州の学習指導要領を比較検討し、多くの州をカバーできる教科書を作成。
 - コストダウン、シェアの拡大
- ・身の回りの現実と取り組むように促す題材。(例:『モモ』大島かおり訳、岩波少年文庫)



.** 第5章 フィンランド **.



【内容】

フィンランドの教育=「平等」と「卓越性」、落ちこぼれをださない教育

- ・生徒間の格差が小さい。
- ・国が生き残っていく術としての教育。(→過酷な歴史と環境)
- ・国語(読解力)は全ての学習の基礎。
- ・高い読解力
- 要因:豊かな読書文化
- 読書好きの国民性
(例:ナルニア国物語、カレクラ、「ムーミン」シリーズ)



.** 第6章 ロシア **.



【内容】

ロシアの教育=愛国心と郷土愛を育む教育

- ・教科書→分厚く文字が多い。(偉大な読書は大作を生む)
- ・小4を対象とした「国際教育到達度評価学会」による読解力調査で1位。

理由 国語の授業の長さ、理想の高さ

- ・レーニンや共産党の歴史、大十月社会主義革命と内戦、大祖国戦争に関する教材がなくなる。
- ロシア正政関係の教材が増える。
- ・多様な教材の導入。
- ・学国文学も扱う。



.** 第7章 中国 **.



【内容】

中国の教育=「語文」を最も重要な教科と位置付ける

- ・小学校で覚える感じの量は2500字(日本は1006字)
- ・漢詩を多く引用。(5年で120首)
- ・教科書→メッセージがシンプルで、迷いが無い。
- ・儒教的価値観を明確に打ち出す。
- 親や教師の物語(多)
- ・「尊老文化」や「尊師」の伝統を謳う内容の教材が多い。
- 教師の理想像の変化が読み取れる。
- ・民族の誇りを教科書の中で語り継ぐ。



.** 第8章 韓国 **.



【内容】

韓国の教育=家族による家族のための教育

- ・韓国→アジアで最も学歴と英語力の獲得に熱心な国。
- ・困難を抱える家庭の子どもの教育を支援。
- 「韓国型ヘッド・スタート」
- ・国語の教科書→何年生用の教科書であっても、最初のページに世宗大王(ハングルを制定した人)の話題が載っている。
- ・韓国人の誇りである民謡「アリラン」。
- ・教科書→日本による植民地支配の内容が掲載。
- 「田中先生がやったこと」...日本からきた先生が韓国の生徒たちにひどい体罰をあたえたりする。

.** 第9章 タイ **.



【内容】

タイの教育=仏教であり、王国であり、グローバル経済に大打撃を受けたことが影響

- ・思考の基礎を培い国家の問題と危機を解決するための学習。
- ・人間性の基礎を培い創造的に思考して仕事をする能力を育成する学習。
- ・仏教に根ざした教育。
- ・教科書→国王・王族や古典文学等が題材。
- 「親への恩返し」を奨励。



.** 第10章 ケニア **.



【内容】

ケニアの教育=独立から半世紀、厳しい現実に対抗する教育

- ・教育機会の平等という面で問題が多い。
- ・貧困層にいる子どもたちが自動的にレベルの低い学校へ。
- ・国家統一試験(KCPE)の成績を重視。
- ・英語能力を高めるため、母語の使用禁止がある学校も多い。
- 4年生以上になると教師が授業で英語を使う。
- ・教科書→ストリートチルドレンが学校に行けない話。
- 「厳しい現実を見つめ、抗う力を与えたい」という願いが込められている。

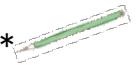
.** わかったこと **.



研究を進めていって、国によって教育の歴史や教科書に大きな違いがあることが分かりました。教科書にたくさん絵画が掲載されていたり、教材として教科書ではなく小説を用いる国もあったりと日本では考えられないようなこともありました。

また、その国の経済状況によっても教育に差があることが分かりました。経済的に豊かな国は日本と同じように、国中の人に教育が行き届いていますが貧しい国では子どもが学校に通うことが出来ていません。

.** 今後の課題 **.



今後の課題は、今まで様々な国の教育の歴史や、その国において【教育】がどのようなものを言うのかということ調べてきたので、次は日本の教育の歴史と、日本においては何を【教育】なのかを調べて色々な国と比較していくことです。また、外国の学校の授業ではどのような学習が取り入れられているのかを調べていけたらおもしろいと思っています。

今回の研究の動機でもあった、各国において【教育】はどのようなものを指すのか、ということも調べることが出来ました。その国によって「その国の市民になるための教育」だったり「子どもが社会に出るための準備をしてあげるための教育」だったり全く異なっていました。1つ1つの国にそれぞれの歴史があり、その歴史もまた大きく教育に関係していました。



少年期の生活体験



1

活動の記録



- ①「子どもの社会力」(門脇厚司 1999年 岩波新書)を読む。
 - ②「小学生になる前後」(岡本夏木 1995年 岩波書店)を読む。
 - ③「ことばと発達」(岡本夏木 1985年 岩波新書)を読む。
- その他に・・・
福井大学講師 八田幸恵先生の話聞く。

3



思ったこと

- 子供は常に進化していく。自分の目に映るのがすべてではない。常に見て行くのが大切。
- しつけは親が子供と一体化して行うもの。親が自分の弱点を見つめ、時にはユーモアをまじえながら子供に教えるのが大切。
- 学校は、勉強をするためだけのところではない。友達との交流での成長、集団で過ごすことでの成長も体感できる。

5

読んだ本Ⅱ

「ことばと発達」 岩波新書 1984年 岡本夏木著 取り上げられていたもの

- 一次のことば
主として生活空間の中で用いられる。
「特定の親しい人」に向けて、また想定して使われる。
- 二次のことば
自らの一方的な情報発信に用いられる。
聞き手が「抽象化された」ことば。
子供は入学するとともに二次のことばの用法を求められる。
- 子供は人々との関わりの中で文脈を身につけていき、二次のことばの習得の中で、語彙を豊かにしていく。
- 昨今は若者の二次のことばの未熟さが嘆かれることが多いが、**一次のことばも二次のことばも習得に不足があってはならないものだ。**



6

目次

- 一、活動の記録
- 一、「小学生になる前後」
- 一、「ことばと発達」
- 一、生活科について
- 一、最後に



2

読んだ本Ⅰ

「小学生になる前後」 岩波書店 岡本夏木著

- 子供が小学校に入る前後にどのように発達するかやそのとき何が必要になるのかについて書かれていた。
- 《「ままごと」の年齢比較》
3歳-4歳-5歳になるにつれて、子供は自らの手で世界を広げていく。
- 《「しつけ」は「自立」の基礎》
「しつけ」は「自立」に変わる。
「あなたが悪いのではない。あなたの行いが悪い」のである。
- 《一年生の思考》
論理的に物事を追いかけて始める。
「新しい世界」を作り上げていく。
- 《子供と学校生活》
だんだんと先生に個人で呼びかけられなくなる。
“われわれ意識”が出てくる。



4

読んだ本Ⅱ

「ことばと発達」 岩波新書 1984年 岡本夏木著 取り上げられていたもの

- 一次のことば
主として生活空間の中で用いられる。
「特定の親しい人」に向けて、また想定して使われる。
- 二次のことば
自らの一方的な情報発信に用いられる。
聞き手が「抽象化された」ことば。
子供は入学するとともに二次のことばの用法を求められる。
- 子供は人々との関わりの中で文脈を身につけていき、二次のことばの習得の中で、語彙を豊かにしていく。
- 昨今は若者の二次のことばの未熟さが嘆かれることが多いが、**一次のことばも二次のことばも習得に不足があってはならないものだ。**



6

- 現代の子供たちは、幼いころから二次のことばの使用法を教えられ、周りに二次的文化があふれかえり、一次的文化を圧殺してきている。こうした一次のことばの空洞化は大人たちが自らのうちに共有できる「原文化」(おとなが幼少時に築いてきた一次的文化)の世界を突き、子供といっしょに生活をつくるのが困難になっていく。
- だがこうした極端に二次的文化に偏った社会の中で、たしかに「生命あることば」はいきづいている。ある特定の人に伝えたことばが、万人の心を打つことがあるし、多数の人々に向けて放ったことばが、ひとりの人を救うこともある。こうしたことばは、一次のことばでも、二次のことばでもなく、両方の特性を備えた人と人をつなぐ架け橋になるのではないだろうか。



8

小学校生活科指導内容

次に・・・

私たちは小学校低学年の生活科について詳しく調べたいと思いました。

そこで！！

八田先生から平成20年8月版の文部科学省による「**小学校学習指導要領解説 生活編**」を手に入れることに成功しました。



第1学年及び第2学年の目標

- ①地域の中で、集団や社会の一員として自分の役割や行動の仕方について考える。
- ②自然の素晴らしさと大切さに気付く。
- ③社会の中で意欲と自信をもって、生活する。
- ④思ったことを表現し、考えることができる。



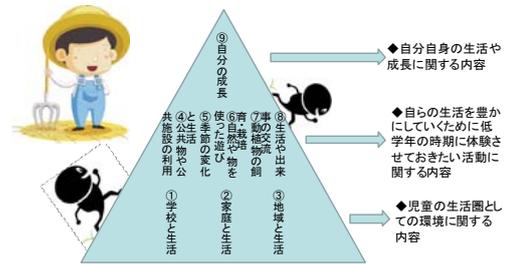
生活科の内容構成

- ア 健康で安全な生活
- イ 身近な人々との接し方
- ウ 地域への愛着
- エ 公共の意識とマナー
- オ 生産と消費
- カ 情報と交流
- キ 身近な自然との触れ合い
- ク 時間と季節
- ケ 遊びの工夫
- コ 成長への喜び
- サ 基本的な生活習慣や生活技能



11

生活科の内容の階層性



12

成長の過程



1 自分自身

- (1)健康や安全、物の大切さを理解し、身のまわりを整え、規則正しい生活をする。
- (2)自分がやるべきことをしっかりとする。
- (3)よいことと悪いことの区別をし、よいことを進んで行う。
- (4)うそをついたりごまかししたりしないで、素直にのびのびと生活する。

13

2 他人とのかかわり

- (1)気持ちのよいあいさつ、言葉遣い、動作などに心がけて明るく接する。
- (2)幼い人や高齢者など身近にいる人に温かい心で接し、親切にする。
- (3)友達と仲良くし、助け合う。
- (4)日頃世話になっている人に感謝する。

14

3 自然や崇高なものとのかかわり

- (1)生きることを喜び、生命を大切にすることを心をもつ。
- (2)身近な自然に親しみ、動物植に優しい心で接する。
- (3)美しいものに触れ、すがすがしい心をもつ。



15

4 集団や社会とのかかわり

- (1)約束やきまりを守り、みんなが使うものを大切にすること。
- (2)働くことよさを感ずて、みんなのために働く。
- (3)父母、祖父母を敬愛し、進んで家の手伝いなどをして家族の役に立つ喜びを知る。
- (4)先生を敬愛し、学校の人々に親しんで、学校や学級の生活を楽しむ。
- (5)郷土の文化や生活に親しみ、愛着をもつ。

16



最後に

私たちは約半年間「教育」をテーマに研究してきました。最初は教育といっても具体的に何を調べればよいのか、わからず頭を悩ませていましたが、私たちの班は「少年期の生活体験」にたどり着きました。

特に小学校低学年の生活科に着目し研究を進めていくと、この時期の子どもは想像もできないほど成長していることがわかりました。身体の成長、言葉の成長、また社会の中で自分の役割そのほかにも多くのことを身につけて成長してきます。

この研究を通して、**ことばが子どもの成長に深く関わっていること、生活体験によって子どもが基本的な生活態度を学ぶことがわかりました。**

17

提出用ワークシート「輪読会レジュメ」

組 番 氏名

年 月 日「 」分野 書名 []

タイトル (タイトルにはもっとも伝えたいことを書く)

--

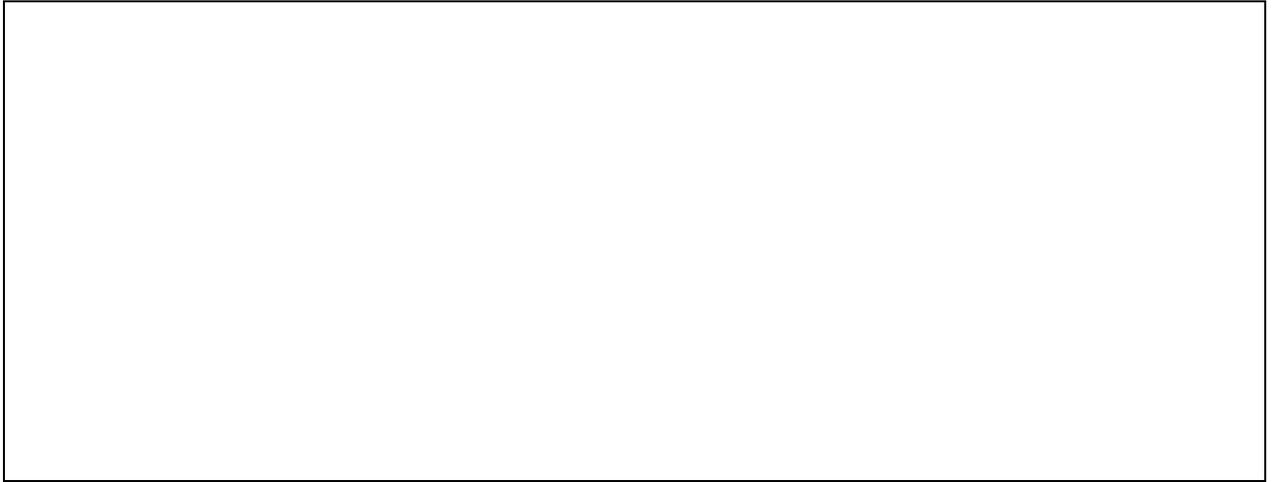
1. これまでのふりかえり

--

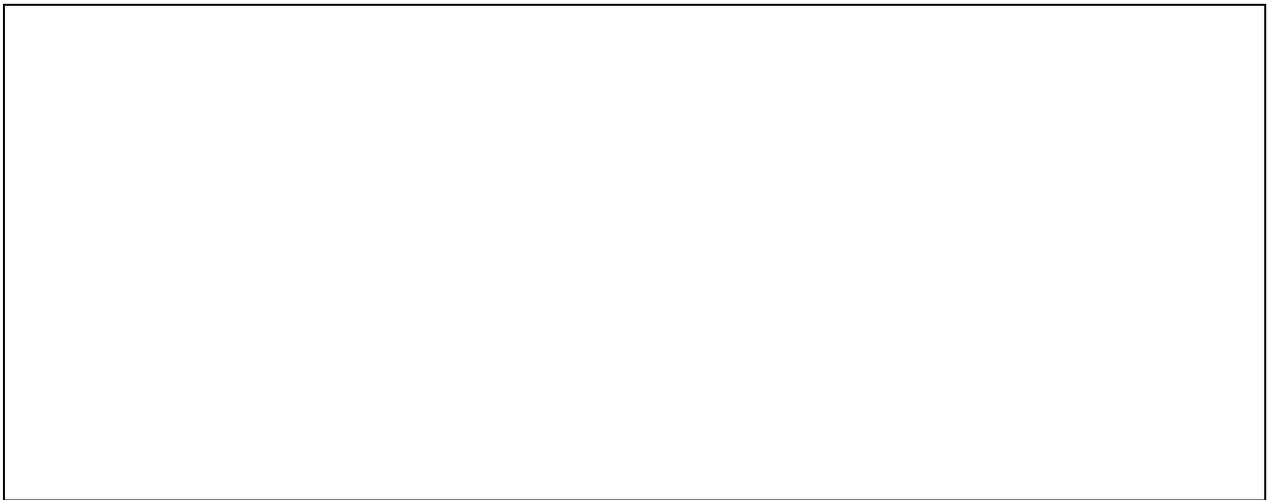
2. 当該部分の要約

--

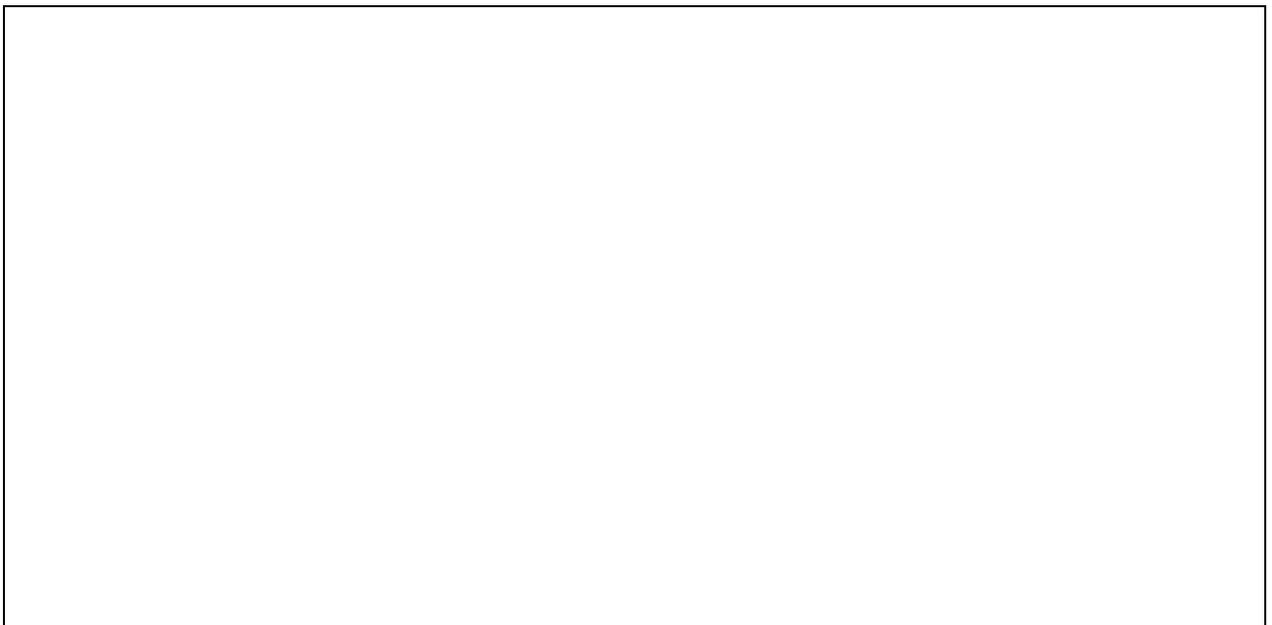
3. 当該個所の要約を踏まえた自分の考えの変容



4. 疑問に思った点・授業で議論したい点



5. 輪読会メモ



論文には以下のような内容が必要になります。今の段階で可能な範囲で全体像を描いてみましょう。

(大島弥生他『ピアで学ぶ大学生の日本語表現』ひつじ書房、2005年 を参考に作成した)

【問い】 自分の研究では

について論じる。

【問いの背景】 その問いを取り上げる理由は

【論証】 問いを論証するために

という活動をして、

【結論】

(すべきである／すべきでない)

という結論を導く。

自分の「問い」を探究していく過程で、関連する小さな問いがいくつも発生するはずです。それらを、いくつかのカテゴリーに分けましょう。例えば、「冤罪はなぜ発生するか」という問いには、「警察」「検察官」「裁判官」「容疑者」などのそれぞれの問題の検討が必要になるでしょう。そしてその各カテゴリーに、さらに具体的な問いが生じるはずです。例えば、「警察の問題」のカテゴリーには、「取り調べの態度は妥当か?」「DNA鑑定の精度は?」などいくつもの問いが生じます。そのそれぞれの問いに「答え」を予想し、調べる手段を考えましょう。

(大島弥生他『ピアで学ぶ大学生の日本語表現』ひつじ書房、2005年 を参考に作成した)

【問い】自分の研究では

について論じる。

問いのカテゴリー①

考えられる問い	自分の仮説（予想される答え）	根拠となるデータ、またはデータがあるかどうかの予想

問いの 카테고리②

考えられる問い	自分の仮説（予想される答え）	根拠となるデータ、またはデータがあるかどうかの予想

問いの 카테고리③

考えられる問い	自分の仮説（予想される答え）	根拠となるデータ、またはデータがあるかどうかの予想

* 必要な 카테고리数 の分をコピーしましょう

- 【執筆】 第1・2・4講 福井大学教育地域科学部准教授 八田幸恵
第3講3 東京大学大学院学際情報学府修士2年 末橘花
第2講<資料> 福井県立藤島高校SSH企画会議
第3講1・2 リポート 福井県立藤島高等学校教諭 青木建一郎
- 【編集】 福井県立藤島高等学校SSH企画会議（平成24年度）
協力 福井県立若狭高等学校教諭 渡邊久暢

高校生のための研究入門 ー探究のサイクルを楽しむー

2012年10月25日第1版発行

編者 福井県立藤島高等学校SSH企画会議（平成24年度）

発行者 福井県立藤島高等学校

〒910-0017 福井市文京2丁目8番30号

電話 0776-24-5171（代）

FAX 0776-24-5189

<http://www.fujishima-h.ed.jp/>